

草津市立矢倉小学校通信 平成31年4月23日 NO.2



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## よい方へ見ようとし、よい方へ聞いていこうとする

『よく見る』とか、『よく聞く』とか言うけれど、これは『目を凝らす』とか、『耳を傾ける』とか、そういうことだけではなさそうだ。その心の底にあるもの、その言葉の奥にあることを、見ようとし、聞こうとしていく。つまり、よい方へ見ようとし、よい方へ聞いていこうとする、こうした見る側、聞く側の構えが大切なんだ。」

生前の父がくりかえし語っていたことだ。父は、続けてこうも語っていた。

「見えることについて、理科っぽく言えば、光が物にあたって、それが反射して自分の目に入る。それで目の奥の網膜の神経が刺激され、それが脳に伝わって、これはこうだと判断する。こんな理屈を習った。でも、それだけかというとは実はそうでもない。大通りの雑踏の中で、誰かが自分を見ている視線を感じて、ふり返ればすぐにでも会いたい人だったということがある。満員電車で赤ちゃんが泣いているところに出くわすこともある。赤ちゃんをだっこしているお母さんも大変だけど、赤ちゃんの方も大変だ。その泣いている赤ちゃんに、にこっと笑顔で、『ああ、ごくろうさんやなあ』と労をねぎらうような心持ちで見ていると、赤ちゃんもにこっとしてくれた。あれを恐れ顔で、『おお、ごくろう』など見つめると、赤ちゃんは余計泣くにちがいない。ことほどさように、こちら側からの視線というもの、それがあたたかなものか、つめたいものかというのは、思うように話せない赤ちゃんでもしっかり届いているものなんだ。」

「見る」とか「聞く」というのは、こちら側が発するものが向こうに跳ね返って見えることになっている…、ひよっとするとそんなからくりがあるのではないか。ものごとをあたたかく受けとめようとするれば、あたたかなものになっていく。人と人との間柄も、仕事と自分との間柄もそうだろう。

今年が始業式、入学式に合わせたかのように桜が満開となった。「なんてきれいなんだろう。」こんなふうに見えるのは、自分が自分を取り戻し、心を落ち着かせているときだ。心配事を抱えたり、イライラし、腹を立てていたりすると、花がそこに咲いていても、咲いているとは思えない。自分が生き生きして、落ち着いていれば、道ばたのものかげにひっそりと咲いている、名も知らないような小さな花にも目をとめることができる。

よい方へ見ようとし、よい方へ聞いていこうとする、そういう心の動かし方、視線の向け方ができてさえいれば、お互いは幸せになっていける。

もうすぐ十連休。ああしてやろう、こうもしたいと予定を実行するだけに心を砕くことなく、今の自分をじっくり味わう、そんなことにも心を傾けたい。

校長 大林 道範